●救命処置特集

大切な人の「命」救えますか？

突然、目の前で家族や友人が倒れたら、どうしますか。救急車が到着するまでの間、手を握り、無事を祈るしかないのでしょうか。心臓や呼吸が止まってしまっても、救命処置を行うことで命を助けることができます。9月9日の「救急の日」に合わせ、ここでは救命処置の必要性やその方法について取り上げていきます。

◇身近な場所で起きている心肺停止

わたしたちは、いつ、どこで、突然のけがや病気に襲われるか分かりません。けがや病気の中でも、最も症状が重く緊急を要するのは、心臓や呼吸が止まった場合です。

総務省消防庁の調査によると、そのような状態に陥り救急車で運ばれた人の数は、1年間で10万人以上にも上ります。プールでおぼれる、のどにもちを詰まらせる、けがで大出血するなど、原因はさまざまですが、その半数以上は心臓疾患が原因だといわれています。

心臓疾患が原因で倒れた人の発症場所を見ると、約7割が自宅で倒れており、その後に公共スペースや職場などが続きます。さっきまで元気にしていた家族や友人、同僚が、突然、苦しんで倒れる――。このようなことが、実際に身近で起きています。

◇わたしたちがつなぐ救命のリレー

周りの人の心臓や呼吸が止まった場合、まず必要なことは「すぐに119番通報をする」ことです。通報が早ければ早いほど、救急隊員による高度な救急処置をより早く受けることができ、病院にも早く到着できます。

しかし、それだけで十分ではありません。治療は1分1秒を争います。図1を見ると分かるように、心臓や呼吸が止まった人の命が助かる可能性は、停止後約10分の間に急激に低くなっていきます。救急車が現場に到着するまでにかかる時間は、全国平均で約6分――。何もせずに救急車の到着を待っていては、助かる命も助かりません。そこで、そばに居合わせた人による救命処置が必要になるのです。

このように①居合わせた人による119番通報②居合わせた人による救命処置③救急隊員による高度な救急処置④医師による高度な救命医療――をうまくつないで命を助けることを「救命のリレー」（図2）といいます。そのうちのどれか一つが欠けても命を救うチャンスが減少します。そばに居合わせたわたしたちが、そのリレーの第一走者になっていることを忘れないでください。

◇救命処置の知識と経験がいざというときに役立つ

一刻も早い救命処置が大切だということは、分かっていただけたと思います。しかし、そのような場面に遭遇したときに、素人に救命処置ができるのでしょうか。講習会でしっかりと学んでいれば、わたしたちでも命を助けることができます。市内でも、そばに居合わせた人が救命処置を行ったおかげで命が助かったという出来事が実際に起きています。

ある日、体育館でバスケットボールを楽しんでいた10代後半の男性が、突然倒れました。救命処置の経験があるAさんが状態を確認しましたが、心臓も呼吸も停止していました。そこで、一緒にいた仲間に119番通報を依頼し、自動対外式除細動器（AED）を持ってくるよう指示。仲間と一緒に心肺蘇生法とAEDの電気ショックを続けると、やがて男性の呼吸が再開しました。Aさんたちの迅速な救命処置のおかげで、男性は一命を取り留めることができたのです。

この出来事は特別な事例ではなく、救命処置で助かったという人がほかにも何人もいます。救命処置の知識と経験があれば、いざというときに役立てることができるのです。

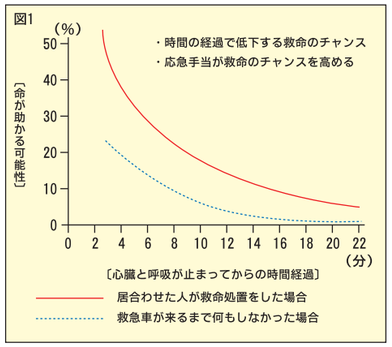
●救急救命士に聞く

奥州金ケ崎行政事務組合水沢消防署
救急救命士　及川正範さん

胆江管内では、昨年4,651件の救急出動がありました。これは1日平均で12.7件出動している計算になります。都心部などと比べて範囲が広いこともあり、救急車が現場に到着するまでの平均時間は約10分です。その場に居合わせた人が救命処置をしなければ、助かる命も助かりません。

そのためにも救命講習会を受講し、救命処置の方法を学んでおくことが大切です。不特定多数の人と接する人や、高齢の家族がいる人は、積極的に受講することをお勧めします。助けようと思って救命処置をした結果、助けられなかったとしても、法的責任を問われることはないといわれています。皆さんも勇気を持って救命処置を行い、わたしたちへとバトンタッチしてください。

■応急手当と救命曲線



■命をつなぐ「救命のリレー」

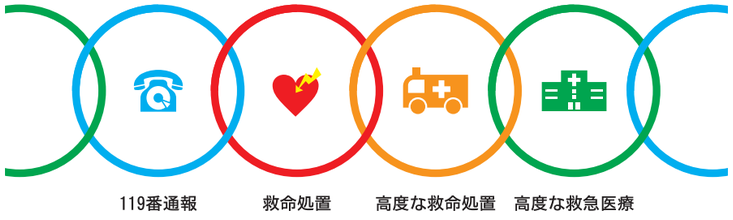



図2